

「おこそ頭巾の女性」

「環境科学部 若木 太一 教授」

西洋人を魅了したファッショ

「おこそ頭巾の女性」は、西洋人にとっていかにも魅惑的なファッションに見えたのではないだろうか。顔だけを見せて、その美しさを強調する構図である。

長崎大学の古写真コレクションの中にも数枚あり、このたぐいの写真は現在も相当残っていると思う。

明治期、日本を訪れた西洋人は、日本の風俗や風景などの写真を好んで買い求めた。そこには、日本人の頭を下げる「挨拶」、「食事」、「風呂」、あるいは囲碁に負けた老人が額を手でパチンとたたき姿など、さまざまな日本的「しぐさ」が撮影されている。「おこそ頭巾の女性」もそうした写真のひとつと思われる。当時の日本人にとってはありふれた日常も、かれらには魅惑的にも、また珍奇にも見えたのであろう。

この「おこそ頭巾の女性」には、爽やかな洗練が感じられる。文句なく美しい。歴史的には、江戸時代中期から明治時代に流行した日本女性のファッションである。モデルのような女性の風俗は明治時代にも流行した。こうした姿の樋口一葉の写真も残っている。

人情本にも登場する粋な姿

文化文政期の人情本『春色梅曆』(為永春)



当時の写真業者は、日本人の暮らしや風俗などを撮影し、アルバムにして外国人に販売した。右の写真は、そうしたアルバムに収められた一枚と思われる。アルバムの表紙には漆を用いるなど、スーベニール・アート(土産用美術品)として凝ったものもあった。明治中期から後期にかけて、売れに売れたこのアルバムは当時の日本のヒット商品でもあった。

長崎大学附属図書館蔵
番号2511

写真サイズ縦26.4cm x 横19.8cm
モノクロに彩色

<http://hikoma.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/>

水作、柳川重信ら画)の冒頭に、米八という芸者らしい女が登場する。舞台はわびしい色男の仮住まいである。

野に捨てた笠に用あり水仙花、それならなくには水仙の、霜よけほどなる侘び住居(中略)外は田畑の薄氷、心解けあふ裏借家も、住めば都にまざるらん。(中略)「そふいいうお声は若旦那さん」(中略)あけてかけ込むその姿上田太織の鼠の棒編、黒の小柳に紫の、やままゆじまの縮緬を鯨帯とし、下着はお納戸の中形縮緬、おこそ頭巾を手に持て、みだれし鬢の島田髷、素顔自慢か寝起きのままか、つくるはねども美しき、花の笑顔に愁いの目もと、...

この写真の背景を描いたような作品である。黒縹子の幅広襟、胸元には牡丹の花の半巾をあしらひ、地味だが粋な棒編の着物を着ている。

いろいろな頭巾が流行る

防寒用であり、ファッショののひとつでもあった「おこそ頭巾」は、御高祖(日蓮上人)の銅像の格好に似ていることから、そう言われるようになったという説がある。それほど古くはなく、宝暦時代(1751~1764)に流行りだしたもので、袖頭巾ともいった。ほかにも隠元頭巾、角頭巾、丸頭巾、焙烙頭巾、紫頭巾、与作頭巾など男女を問わず、いろいろな形や素材のものが流行した。

時代は変わり、日本ではこのような姿は見られなくなった。世界に目を向けると遠く離れたイスラム文化圏に女性のチャドルが思い浮かべられる。